

特集のねらい 陸上競技における実践研究の活性化

榎本靖士¹⁾ 森丘保典²⁾

1) 筑波大学体育系 2) 日本大学

スポーツ科学において実践研究の価値が指摘され(福永, 2018), その方法論も検討されているものの(山本, 2018), 実践研究はそれほど広がりや深まりをみせていない. 山本(2018)は, 実践研究とは「現場での暗黙知を, 他者にも見えるような可視化されたデータ(形式知)で表し, それに考察を加えて磨き, 同業者にとって役立つ知見(実践知)にすること」と提案している.

科学哲学では, 科学は本来の真理を追求するモード1と, 社会の要請に応え役立つことを目的とするモード2に分けられ(表1), モード2科学の価値とともに知識生産の難しさと危うさが論じられている(ギボンズ, 1999; 伊勢田, 2011). スポーツにおける実践知を生産し, 役立てるためには, 暗黙知を実践における経験や作法のもとで理解され, 習得されなければならないと考えられる一方で, 暗黙知を形式知化することの重要性も指摘されている(野中と紺野, 1999; 結城, 2016).

教育学の世界では教育学と教育実践学の違いを認識しつつ, 教育実践研究における知識の質(論文)を評価する難しさがあることも指摘されている(市川, 1999). スポーツ科学は科学としてその

地位を築くため科学としての(論文による)知識生産を追求するようになったのは必然と言える. なぜなら科学は本来, 真理の追求であり, 社会や人の生活に役立つとか, 一般に広く普及させるものではなく, 知的生産活動を行なう科学者の共同体において, お互いにその確からしさを確認および批判し合う(コミュニケーションする)ものであり, 共同体の中において完結するものであるとも言える(村上, 1999). しかし, 科学技術の時代となり, 科学の研究成果を生かして実践を良くする開発がおこなわれるようになり, 社会に, すなわち実践に役立つ研究が期待されるようになった. スポーツ科学には伊勢田(2010)の言うモード2的科学研究や知識コミュニケーションが期待されているにもかかわらず, モード1的性質から抜け出せずにいる(むしろモード1的性格を強めている)と考えられる. 2000年あたりには現場に役立つ研究として学際的(インター・ディシプリナリー)研究が提案されたが, 伊勢田(2010)は超領域的(トランス・ディシプリナ

表1 科学のモード

モード1科学	モード2科学
世界の解明が主な目的	問題解決が主な目的
物理学・生物学など	環境学・情報学など
大学が研究の中心	大学・政府・自治体・企業などの協同が不可欠
CUDOSと呼ばれる科学のエートスを重視	CUDOSより問題解決への有効性が優先

Communalism 共有主義
Universalism 普遍主義
Disinterestedness 利害の超越
Organized Skepticism 組織的懐疑主義

伊勢田(2011)
科学の拡大と科学哲学の使い道
「もうダメされないための「科学」講義」

モード1科学
(基礎科学)
学術研究
ディシプリナリ

モード2科学
(応用科学)
学融研究
トランスディシプリナリ

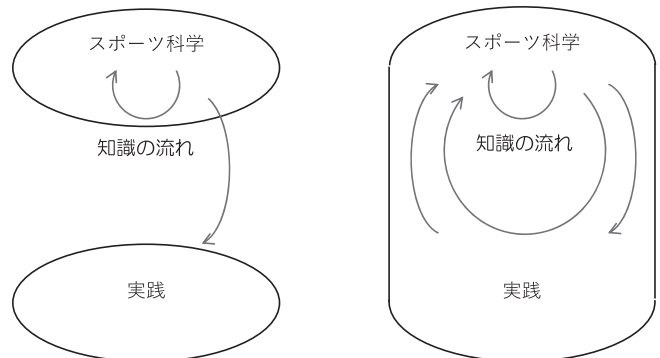


図1 学術領域研究(ディシプリン)と学融的研究(トランスディシプリン)

リー) 研究として従来の手法にとらわれず課題解決のための手法を用いることが不可欠であると述べている(図1)。

実践研究が活性化しない背景の1つには、モード2科学の質の保証の困難さが指摘されていることが関係していると考えられる。すなわち、実践研究は実践に役立つ知識(実践知)の生産および普及を企図しているが、そのためには、実践にかかわる人たちに理解される知識が必要となり、このためにはモード1的科学的手法や作法では実践に役立つことがしばしば困難となる。そのため実践にかかわる人たちの科学リテラシーの向上が望まれつつ、知識生産や普及の問題が指摘されることになる。そして、実践研究の質保証のために、伊勢田(2010)はモード1的科学的で身につけた研究手法が役立つとは限らないこと、さらにギボンズ(1999)を引用し、これまでの査読や再現性といった質保証の基準に加えて市場性や社会的受容可能性を上げている。一方で、科学的手法にのっとらない疑似科学と区別するために、生データの共有や相互批判のフォーラムの強化などの異なるシステムの有効性を上げ、最大信頼性メタ基準を提案し、目的とする課題解決につながっているか、対象の性質や現場において最大限信頼できる手法を用いていることなどメタ基準として評価する、あるいはイメージすることで活性化すると述べている。質的心理学の方法論においても、やまだ(2010)は科学として再現可能性、省察性、不変性、そして予測可能性などがそなわっていることをあげている。

根拠に基づく実践(Evidence Based Practice: EBP)が国際的に望まれており、そのためにも実践研究は必要不可欠であろう。根拠(エビデンス:理論やモデル)に基づいた実践、そして研究の好循環により実践研究を推進することが、実践に役立つ知識を浮き彫りにし、実践を良くするために寄与するばかりでなく、実践研究を良くすることにつながるはずである。陸上競技における実践研究の質保証のための方法論や基準を議論することが、陸上競技学の発展と普及に不可欠であろう。本特集では、陸上競技における実践研究を、短距離、中距離、跳躍、投てき種目を例に執筆いただき、それらを相互に査読し、そこで生じる方法や内容に関する問題を議論することで陸上競技における実践研究の活性化を狙いとするものである。

引用文献

- 福永哲夫(2018) 体育・スポーツの実践研究はなぜ必要なのか. 福永哲夫・山本正嘉(編) 体育・スポーツ分野における実践研究の考え方と論文の書き方. pp. 1-7. 市村出版.
- ギボンズ, マイケル(1999) 現代社会と知の創造. 丸善ライブラリー.
- 市川伸一(1999) 「実践研究」とはどのような研究をさすのか-論文例に対する教心研編集委員の評価の分析-. 教育心理学年報, 38. 180-187.
- 伊勢田哲治(2010) 認識論的問題としてのモード2科学と科学コミュニケーション. 科学哲学 43(2) 1-17.
- 伊勢田哲治(2011) 科学の拡大と科学哲学の使い道. もうダメされないための「科学」講義. 菊地誠ほか(編) 光文社新書. pp. 65-100.
- 今井康雄(2015) 教育にとってエビデンスとは何か-エビデンス批判をこえて-. 教育学研究 82 (2) 188-201.
- 村上陽一郎(1999) 科学・技術と社会. 学術の動向 4 (11), 20-24.
- やまだようこ(2010) 新しい質的心理学の方法論を求めて. 心理学ワールド 51, 33-36.
- 山本正嘉(2018) 体育・スポーツの実践研究はどうあるべきか. 福永哲夫・山本正嘉(編) 体育・スポーツ分野における実践研究の考え方と論文の書き方. pp. 8-30. 市村出版.
- 結城匡啓(2016) 私の考えるコーチング論: 科学的コーチング実践をめざして. コーチング学研究 30, 97-104.